
Game of Gather of Wish

柊 玖遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Game of Gather of Wish

【Zコード】

N2887W

【作者名】

柊 玖遠

【あらすじ】

Game of Gather of Wish
-願いの集まりしゲーム-

この物語はLive or Dead Crisisゲームという

王に勝てば

なんでも一つ願いが叶うというゲームである

そのゲームにとある事件で妹を亡くした主人公が

あることがきっかけでそのゲームに参加することになる

主人公はこのゲームの中で色々な人と出会い
王に挑戦する主人公を描いた物語である

プロローグ

Live or Dead Crisisゲーム、略してLDC、それは強い願望を持つている人間のみが参加できるゲームである。

-プロローグ-

「お兄ちゃん……沙耶ね、お兄ちゃんに言いたかったことがあるの」「ん？ 言いたいこと？ でもごめんな……俺、遊びにいかなきやいけないからまた後で聞いてやるよー じゃいってきます」「やばい遅刻だ！ 急がないと間に合わないよ」

急いで走っていると車の急ブレーキの音となにか重いものが地面に叩きつけられた音がした……振り返つてみるとそこには横たわって寝ている女の子がいた

「ん？ 沙耶ッ！」

沙耶は俺の後をついてきてたらしくトラックに跳ねられて道路に横たわっていた俺はすぐに救急車を呼んだが沙耶はそのときもう息はしてはいなかつた

すべての始まり

「お兄ちゃん……沙耶ね、お兄ちゃんに言いたかったことがあるの」「ん？ 言いたいこと？ でも、めんな……俺、遊びにいかなきやいけないからまた後で聞いてやるよ……じゃ、いってきます」「やばい遅刻だ！ 急がないと間に合わないよ」

急いで走っていると車の急ブレーキの音となにか重いものが地面に叩きつけられた音がした……振り返つてみるとそこには横たわって寝ている女の子がいた

「ん？ 沙耶ッ！」

沙耶は俺の後をついてきてたらしくトラックに跳ねられて道路に横たわっていた俺はすぐに救急車を呼んだが沙耶はそのときもう息はしてはいなかつた

「うわっ……またこの夢か……やっぱ沙耶は俺のせい……あのとき沙耶はなにを言いたかったんだろうか……もう一度沙耶に会えれば」

俺は「最近になつて5年前のある事故のことがよく夢にでてくるようになった

それまでは月に一回あるかないか程度であつたのだが、最近は一週間に二回くらいの割合での夢を見るよつになつた

ある事故とは「小学3年生のある女の子がトラックに跳ねられて即

死した事件」だ

普通の人からみれば普通の小学3年生がトランクに跳ねられて、即死ということで普通の事故なのだが、俺には他人事のようになつて流せるような事件ではなかつた

ある女の子……それは俺、柊 鏡也の妹、柊 沙耶なのだ

沙耶は俺に言いたいことがあつたらしく、それを無視して遊びにいつてしまつた俺の後をついてきて事故にあつた

俺は今そのとき少しくらい遊びに遅れてでも妹の話を聞いてやればと後悔している……

今になつて沙耶が言いたかつたことがなんなか気になつてこむ……もう一度沙耶に会えれば……

そんなことを思つていたら

「気になりますか？ あなたの妹さんがなにをいいたかつたのか」

そこには黒い燕尾服をきた黒い短髪の男がそう話をかけてきた

「うわッ！ 誰だよお前！ つかなんで勝手に家に上がりこんでるだ！」

「申し送れました、私はゲームの主催者の使いのもので佐藤と申します、貴方をゲームに招待するために参りました」

「ゲーム？」

「そうです。 ゲームは強い願望を持つたもののみが参加できるゲームです。 このゲームで私のオーナーに勝つことができればなんでも一つ願いが叶いますよ？」

佐藤は不吉な笑みを浮かべてそう言つた

「なんでも？ 沙耶にもう一度会うことともできるのか？」

「もちろんですよ。 どうです？ ゲームに勝利してもう一度妹さんと会われてみてはどうでしょつか？」

「でも……」

「強制参加ではありません。 もし参加する意思があるのであればこちらをお読みください」

佐藤はそう言って黒い封書を渡してきた。

「その中には簡単なルール等が入っています参加なされる場合は契約書をご記入のほうお願ひいたします、記入した時から貴方はもうゲームに参加したことになります」といつて佐藤はいなくなつた。

「ゲームに勝利したらなんでも願いが叶う……そんな馬鹿げたことがあるわけない……けど、もし存在するなら……」

俺は佐藤が残していつた黒い封書を見つめた

「見るだけみてみるか……」

-ルール-

ゲーム、それは強い願望を持つたもののみが参加するゲームである。ゲーム参加すると一つ能力が与えられる。

その能力を使い戦いGPを稼ぐ必要がある

GPはゲーム世界の金であり一定のGPを払うことでゲームマスターに挑戦することができ、ゲームマスターに勝利したら願いが叶うただし願いを叶えたらこの世界に関する記憶が消える

- 契約書 -

幾年を経て奪い続ける欲望はあるか

幾年を経て狂い続ける覚悟はあるか

幾年を経て傷付き続ける気迫はあるか

幾年を経て喰らい続ける邪欲はあるか

幾年を経て願い続ける希望はあるか

貴公が如何なる行為を以つてしても、願いを叶えたいならば貴公の名を此処へ記せ

〔

「如何なる行為を以つてしても、願いを叶えたい……か、俺は沙耶にもう一度会いたい」

俺は覚悟を決めて契約書にサインをした……
その瞬間契約書が光りはじめてその中に俺は消えた……。

「ゲームの参加ありがとうございます」

頭の中に直接声が流れた。

「どうぞ……」

そこに広がっていた光景はまさにデジタルの世界で緑色のよくわからない文字がまわりにいっぱいありそれが随時変わっていた「ここはゲームの世界です、今回ゲームについて説明させていただくゲームサポートーのリンクファと申します、今こちから貴方の脳に直接話しかけていますので違和感があるかと思いますがご了承ください」

「ああ、我慢できるレベルだ、さあと説明を済ませてくれ

俺は沙耶に早く会いたい一心だ

「わかりました。早速説明に移らしていただきます、最初に黒い封書に書いてあった通りこの世界では能力が重要になってきます。このゲームに参加すると能力は手にはいります、なのでいま貴方にも能力があります

能力はその人の願望の強さによってレベルが分かれます、レベルは七から一でわかれています「俺はゲームマスターになります」

「俺はレベルいくつ?」

「レベル一になります」

低い……俺はそんなんでゲームマスターに勝つて沙耶を生き返らせることができるのだろ?か……いや駄目だ……弱気になんかなつちや……

俺はゲームマスターを倒して沙耶を生き返らせる……そのために来た

「その能力を使って他のプレイヤーを倒しGPを手に入れてください。ゲームマスターに挑戦するには1,000,000GPが必要です。GPはこの世界のお金そのものなのでGPがなないと食事もとれません」

「倒すとどのくらいのが手に入るんだよ」

「いい質問ですね。一人倒すことによつて得られるGPは人それぞれですがレベルが高いほうがGPは高いですね」

「だからいくらか聞いてるんだよ!」

「レベル6を倒すと100,000GPでレベル1だと100GPといったところでしょうか」

「レベル6を10人も倒さないといけないのか……」

「ですがそれ以外でも町で月に一度開かれるイベントに参加して優勝したり、町の外れにいるモンスターとかを倒してもGPは獲得できますよ」

「モンスター……どんなやつなんだろうか

「これで説明が終わりました。

それではいよいよゲームに参戦していただきます、いらっしゃいます」

リンフィアが最後に不吉な笑みを浮かべていたような気がしたがいまの俺は気にはならなかつた

「ここがゲームの世界か、現実と大差ないな……」
そこには見晴らしのいい草原が広がつていた

「それにしても俺の能力はどんなのなんだろうか……レベル2か……」

「そんなことを考へているとき後ろから空氣を切るような音がした

「そこの君！ 危ない」

遠くから黒髪のいかにも可憐いらしい女の子がなにかを叫びながら走ってきた

もの音がしたほうを向いてみるとナイフが飛んできていた

「！？」

俺はなにが起ったのかわからなかつた振り向いたときにはもうそのナイフは地面に叩き付けられていた

「間に合つたわね……」

「チツ、殺し損ねた……」

ナイフを投げつけてきた奴はいつの間にかいなくなつていた

「逃げられたか……」というかごめんなさいね

巻き込んだじやつて……私は日向ひゅうが 凜、貴方は？

「俺は柊 鏡也、さつきのはいつたいなんだつたんだ？」

俺はまったく状況が把握できていない

「え？ 殺し合いよ

「こッ殺し合い！」

「そうよ？ 貴方このゲームがなんなのかわかつてる？」

俺はまったく理解できていなかつたこのゲームがどんなゲームなのか……

（……なんだよこのゲーム）

「なんも知らないみたいね。このゲームは殺し合いをするゲームなによ簡単に言うとね」

俺は正直口向 凜といつ人物の言つてゐる意味がよくわからなかつた

「どうゆうじいとなんだ？ 殺し合い？」

「貴方はなにか叶えたい願いがあるからここにきたんでしょ？それを叶えるためにはG Pが必要ということはゲームサポーターから聞いたわよね？」

「ああ」

「そのG Pは他のプレイヤーを殺して手にいれるのよ？」

「殺すだと？」

「殺されたやつはどうなるんだ？」

「もちろん死ぬに決まってるでしょう なんでも願いが叶うんですもの、それなりのリスクがあつて当然だわ」

負けたら死ぬ…

「拍子抜けした顔ね、貴方の能力はなに？ それを使って自分を守ればいいじゃない」

（能力……でも俺はレベル2だ 勝てるわけがない……死んで俺は

終わるのか？）

「ねえどんな能力？ つて聞いてるんですけど」

「ああ、すまん……能力、それがなんなのかわからないんだ」

「わからない！？ 貴方もしかしてルーキー？」

彼女は驚いた顔でそう聞いてきた

「ああ、いまさっき来たんだ」

「そう、じゃあ仕方ないわね 少しだけ一緒に行動してあげるわ 協力したほうがG Pも 早く貯まるしね」

日向 凜が協力してくれると言つたとき少し安心した俺がそこに はいた、まだあつてから少ししかたつてないけど信用しても良さ そうだ

「まずはどうしましようか」

「どうしようかと言われて も……俺はまだなんにもわからないから 日向に任せるよ」

「日向なんて堅苦しい呼び方はやめてよ、これから協力する身じや ない、柊くん」

「ならなんて呼べばいいんだ、つかそうゆうなら俺のこととも柊くん

「うのはやめろよな」

はつきりいつてからかわれてるのかと思つた

「そうね、私のことは凛でいいわよ？柊くん」

「また呼ばれた……柊くんなんかれないな

「柊くんはやめろつて……俺も鏡也でいいよ、凛」

「いきなり呼んでしまつたが大丈夫だろうか？」

「わかつたわ鏡也、改めてこれからよろしくね」

「おう！ つか今はどこに向かってるんだ？」

「適当に歩いてるだけなんだろうか？」

「んーそうね……どこ向かってるんでしようね？」

「ツおい！ 目的地ないんかい！」

思わずツツコミを入れてしまつた……

「ふふつ、いいツツコミね！ まあ目的地はちゃんとあるわよ……

「あるんかい！」

「またツツコミを入れてしまつた……

「ふふつ、またいいツツコミね鏡也センスあるわね」

「なんか褒められた……でも喜んでいいのか？」

「んで結局どこに向かってるんだ？」

結構気になつていて話に戻してみた

「最初の町マサラタウ♪じやなくて！ ホープタウンよ」

マサラタウ♪つてあの某人気モンスターGの最初の町じゃねーか！つて心 の中でツツコミいれたわよね？」

「なんでわかつた？ こいつエスパーか？」

「……」

「図星ね！」

「ホープタウンってどんな町なんだ？」

軽くスルーをして話題を変えてみた

「無視！？」ま、まあいいわホープタウン……それは希望の町よ……」「いつやるわね……と凛は心の中で思っていた

「そのまんまじゃねーか……」

またツツコミをいれてしまった……

「ま、まあそうね！ まあルーキーにとつてはひょいといこんじやないかしら？」

「そうか……まあ凛に任せせるから」

とりあえずいまは凛を信用して任せるしかないと思つた

「任されてもね……あ、着いたわよポープタウン」

そこはかなり人がいて賑わっていた

「すごい人だな……つかこんなにゲームに参加しているやついるのか？」

「まあ初心者の町だしね……ルーキー狩りする奴らもいるから氣をつけたほうがいいわよ？ まあ私がついてるから大丈夫だとは思つけどね」

「ルーキー狩り？ なんだ初心者を狩るのか？」

「ルーキー狩り？」

「その名の通りよ、初心者を狩るのよ」

また物騒な……まあそうゆうゲームだからしうがないのかな……

「狩つてどうするんだ？」

「G Pを獲得するに決まってるじゃない」

「でもレベルが低いやつはそんなにG Pもらえないって……」

「ルーキーでもレベルが高いやつなんているわよ、レベルはその人に願いの強さで決めら れるんだから」

「そうなのか……でもどうやって技とかを出すんだろうか……」

「まあまず鏡也は能力を使えるようにする必要があるわね……

「どうやるんだ？」

「能力が使えないとかバトル以前の問題だ……

「それはわからないわ……私のときは敵を殺したい！ と思ついたら自然に使えるよう になつてたわ」

殺意が自然と能力を発揮させるのか？

「敵を殺したい……か」

俺にできるのだろうか……でも能力が発揮しないと願いを叶えることができない……

「あ！ そう言えばまだ凛の能力聞いてなかつたよな？」

俺が凛に話しかけたとき、凛の表情が険しくなつていた

「おい……どうし

たを言う前に凛に静かにするようなポーズをとられたので小声でもう一度話しかけて みた

「おい……どうしたんだ？」

「黙つて……誰かがこっちを見てるわ」

「え……」

俺は状況が把握しきれていなかつた

誰かつて敵かなにかか？

「敵なのか？」

思い切つて聞いてみた

「わからないわ……もしかしたら私の能力を拝見できるかもね」

敵！？

もし敵だとしたら危険な状況なはずだ……

俺が能力を使えない今俺は足手まといになる……

「来るわ……」

凛がそういつた瞬間後ろの物陰からなにか黒い影が見えた

「くつ……」

凛が振り向いた瞬間凛はその影になにかをされた

「大丈夫か凛！」

「大丈夫よ……それより私の後ろに隠れて」

凛の後ろに隠れる！？ やっぱ俺はなにもできないのか？……

「七色に輝く宝石よ……それぞれの力を今解き放て！」

凛の周りの赤、青、緑、黄、茶、黒、白の七色の光輝く石が宙に

舞っている

「これが凛の能力……」

「敵の姿が見えないわね……」

凛が能力を出した途端相手の黒い影が見えなくなつていた

「逃げたのか？」

「たぶんそれはないわ、だつて気配を感じるもの」

「氣配？そんなものは俺には感じなかつた

「ふふふつ……お前たちに俺の姿は見えぬよ

どこからか相手の声が聞こえる

「どこにいるのよ……」

凛も相手が見えなく苦戦しているようだつた

「ツ……」

凛がまた攻撃を食らつたようだ……

「大丈夫か！？」

「平気よ……こんくらい」

それにしても見えるのは黒い影だけだ……

ん？影……？そつか！

「凛ツ！ 相手は影に隠れているんじゃないかな？」

「影！？」

「そうだ！ 毎回凛が攻撃されるときに黒い影が横切つた感じになつてまた消える……」

「やつてみる価値はあるみたいね」

凛がなにかするようだ……

「光を宿りし白き宝石よ……いまその力を發揮しすべての闇を消し去れ！」

凛がそういつた途端白い宝石が光だし周りの影がすべて消えたその瞬間そこには人がいた。

「そこねツ」

凛がとつさに赤い宝石を使いその人にダメージを食らわせた

「ぐはツ……ふつ意外とやるな……小娘、今回は見逃してやろう」

そういうつて謎の影に隠れていた男は消えた

「逃がしたか……それにしても影に隠れるなんて卑怯ね」「でもそれを克服した凜もすごいと思った

「そうだよな……つか凜、その宝石は何なんだ?」

「これ?私の能力だけど……」

それは知っている!

「いや……その能力の話なんだが」

「ああ、私の能力レインボーストーン、赤が炎で青が水、緑が風、黄色が電気、茶色が土、黒が闇、白が光という一つずつ属性があるの

色々組み合わせたりもできるわよ」

「すごい……組み合わせが無限のような能力だな

「すごいな……ちなみに凜はレベルはいくつなんだ?」

「そういえば聞いてなかつた

「私? 私はレベル4だけど……」

「レベル4!?」

俺は正直びっくりした……なんてやつだ……かなり強いじゃないか……

「私も鏡也のレベル聞いてなかつたわね……

でも自分の能力がわからないんじゃわからないか

「俺か?俺はレベル2だよ」

「レベル2!? ていうかなんで知ってるの?」

「ゲームサポーターから聞いたんだ」

「へえーそんなことも教えてくれるのね」

「? ジャあ凜はどうやって自分のレベルがわかつたんだ?」

「私?私はレベルチエッカーを使ったのよ」

「レベルチエッカー?」

「そうよ、町に一つ置いてあるわ、有料なんだけどね、なんか変なボックスでね、そこで 能力を使うと自分のレベルが表示されるのよ」

凜は俺が無料で聞いたことに対する不満の顔をし

ていった

「へえそんなものがあるのか……つかこれからどうするんだ?」
いきなり敵に遭遇したわけでの先なにするのか聞いてなかつた

「そうねーとりあえず食料でも調達しましょつか」

「食料? 普通に買うのか?」

「調達? 普通に買えばいいじゃないか」

「買う? 馬鹿じゃないの? GPはこのゲームでのお金、食料を買うのにだってGPはかかるのよ? 貴重なGPを無駄にはできな

いわ」

でも買う以外になにがあるだろつか

「じゃあどうやって食料調達するんだよ」

「ん? そりやもちろん狩るー。」

「狩る! ?

「……」

俺はとてつもなく微妙な顔をしていた

「なによその顔」

「狩るってなにをだ?」

「もちろんモンスターよ、最初にゲームサポーターに教えてもらつたでしょー。」

「ああそうだつた……プレイヤーも倒す以外にもGPを稼ぐ方法があるとかなんかいってたな

「それにモンスターを倒すことでGPも手にはいり食料も手にはいる……まさに一石二鳥だわ」

「そうだな……俺も戦闘になれておきたいし
能力も開放したい……俺にとつても好都合か

「わかつた行こ」

「じゃ着いてきなさい? ビツセビツとかわからないでしょ?」

「はいはー
まあそうだけど

「はいは一回でいいつて留わなかつたかしりへ。
やつぱ言われたか……

と変なやり取りをしながら歩いていると町外れといつべきょうつな
場所についた

「なんだここ……ほんとに町外れつう感じだな」

そこは崖のようなものがたくさんありかなり荒れていた……

「あんなにぎやかだつた町の裏にこんな場所があつたとはね……」

「まあ町はずれでモンスターが住み付いてる場所だからね……まだ
この町辺りじやそんな に手ごわいやつはいないとは思つけど、た
まにすごい強いのいるから氣をつけてね」

「たまにすごい強いのって……危なくないか?」

「まあ俺も能力が開放できるよにがんばるよ……」

「まあでつかいのにあつたら私を呼びなさい」

俺は改めて頼りになると改めて実感した瞬間、背後からものすご
いでかい巨人が現れ

「でたわね……」

「こいつ強いのかー?」

とりあえずでかいので聞いてみた

「そうでもないわよ、でかいけどね」

凜はそういうて七色の宝石を使つていとも簡単にその巨人を倒した
「やつぱ凜すごいな……」

俺は改め凜をすごいと実感した

「そう? 鏡 also 能力があればそのくらいできるわよ

「いや……俺には無理だ、凜だからだよ」

「なんでそんな弱気になつてるのよ叶えたい願いがあるんでしょ?」
「うん……」

なんで自分でも弱気になつていいかわからなかつた

「じゃあがんばりなさいよ」

「おう! ありがとな凜」

俺は凜に勇気付けられた

「さてと、さつさと食材集めますか！」

「そうだな！能力なくても倒せるやつとかいる？」

「能力が使えない俺も少しは役に立てるかちょっと笑顔で言つてみた

「んー素手じゃちょっと無理があるわね」「やっぱ能力じゃないと無理なのか……

「そうか……」

「でも！ 大丈夫よ、これあげるわ

「ん？」

俺は凛からナイフみたいなものをもらつた

「ナイフ…………？だよな」

「そうよ、能力が低いレベル一の人やまだ能力が開放されてない人
がある程度戦えるよう にと町で売つてゐるよそれに魔法系の人は
物理な攻撃ができるないじやない

「なるほど……」

結構ゲームの中は便利なんだなと俺は思つた

「まあサンキュー」これでモンスターを狩ればいいんだな

「そうよ、でもさつきみたいな巨人は無理よ」

「それはそうだ……だつてナイフだし、刃渡りが15cmくらいだ

「じゃどんなやつが狩れるんだ？」

まあ小さいやつだろ……

「小さいやつよ」

そのままの返事だつた……

「そ、そうかたとえばだ！」

「たとえばか……まあとりあえず小さいやつよ

……とりあえず小さいやつと言われた

「まあとりあえず小さいやつなんだな！ わかった

とりあえずわかつたと言つて俺は凛と別々に食材を探すことにな
つたが俺が能力が使えなく大きいやつに出会つたら逃げるしか手
がないためあんまり離れないように言われ

「とりあえず小さいやつと言わてもな……まずモンスターが見つ

からない

周りには断崖絶壁の崖や大きな崖ばかりだった

「こんなところに小さいやつはでるんだろうか……」

そんなことを思いながら歩いていると後ろから石ころが転がるような音がしたので振りかえってみた

「……」

そこには緑色で身長が80cmくらいの小柄な感じの鬼みたいな奴がいた

「なんだこいつ……」

俺はいきなり出でてきたのでびっくりしていただがたぶんそれは凜が言っていたモンスターといつ奴だろう、手には変な棒つきれみたいのを持つていた

「これはチャンスだ！」

さつそく狩ろうとナイフを構えた瞬間その緑色の鬼が棒つ切れみたいので地面になにかを書き始めた

「……？ なんだこいつ」

なにかの魔法かと思ったが落書きかとも思ったので気にせず狩りにかかりた

俺がナイフを振り下ろした瞬間その緑色の鬼の姿はなかつた

「ツ！？ どこ行つた……」

俺が回りをキヨロキヨロ探していくと後ろから急に頭に飛び蹴りをいれられた

「ぐつ……」

いきなりのことでしかも後頭部への蹴りだったためかなりダメージを負つたけどそれを気にせず俺はまたナイフを振り下ろしただがまたそこには緑色の鬼の姿はなかつた

「すばしつこい奴だな……」

また探していると後ろからなにかを地面に書くような音がしたので振りかえってみると 緑色の鬼がまた地面にさっきの途中を書いていた

「なにを書いているんだこいつ……」

俺は様子をうかがいながらこいつそりと近寄り一気に斬りにかかった
なにかを斬った感覚はあつただがそれは緑色の鬼ではなかつた

「石！？」

俺が斬つたのは石だつた

「またあいつ逃げたか！」

斬つたあと体制を変えて後ろを向いた瞬間

「鏡也逃げて！」

と凜が言つた、言つたと同時にあの緑色の鬼が書いていたものが
光だしその中から緑色の大きな鬼がでてきた

「なんだこれ！？」

「その小さい緑色のやつはペアコンというモンスターよ」

ペアコン？なんだその変な名前は

凜はつづけて

「そいつの能力はあらゆるところに手に持つてている棒で魔法陣を書いて親を呼び寄せるのよ」

といつた

なんだその能力は……

「とりあえずどうすればいいんだ？」

俺は魔法陣のすぐ横にいたため真横に緑色の大きな鬼がいる

「そうね……そのナイフが勝ち目はないわね……とりあえず逃げなさい！こいつは私がやるわ」

「わかった！」

また俺は凜に頼るしかなかつたそんなことを思いながら俺は全力
でそこからにげた

凜は俺が走り始めたと同時に能力である内の赤い宝石を使って敵
を倒した

その後凜は青い宝石を使って小さいほうの敵も倒した

「ふう……終わつたわね」

「凜はやつぱすごいな」

「そうでもないわよでもよく攻撃に耐えたわね、結構レアなのよ？」

「そうなのか？」

意外と驚いた、あんなモンスターがレアだとは思いもしなかった
「そうよ、だから結構GPも入ったわあなたにもはいつてるはずよ
「そいやってみるんだ？」

GPの見方なんてゲームサポーターが教えてくれたか、俺は記憶
をたどつたが言つてい　ない気がした

「ああ、鏡也はまだ持つてないのよね
持つてない……？　なにがだ？」

「なにをだ？」

「GPカウンターつうアイテムなんだけどそれを持つてるとその場
で所持GPを確認でき　るのよ」

そんな便利なアイテムもあるのか……

「じゃあ持つてない俺はどう確認すればいいんだ？」

「バンクに行けばいいのよ」

「バンク……？　銀行か？」

「バンク？」

「銀行のことよ、ゲーム世界はほとんど現実世界と同じよ
ゲームにも銀行があるとは思いもしなかつた

「銀行でどうするんだ？　口座なんてもつてないぞ？」

「あらかじめ口座は作つてあるのよ、鏡也がそれを持つてないだけ
あらかじめ作つてある？持つてないだけ？まつたく凛の言つて
いることがわからなかつた

「どうゆことなんだ？」

「まあ簡単言えばバンクにいってあなたの情報を入力して指紋とか
顔とかを一致させれば　口座をもらえるわ

「そうなのか……さすがゲームの世界だ

「それでGPがたぶん今回アモンスター倒したから結構入つて
と思つからそれでGP　カウンターを買いなさい」

結構はいつてる……？

「結構はいつてるって口座もつてないのにPGPは溜まるのか？」

「当たり前よ」

「なんてゲームだ……結構便利なんだな

「じゃさつそく町に戻りますか！」

「食材はどうするんだ？」

「食材はどうするんだ？」

俺はまだ最初の巨人と緑色の鬼にした出会つていないこれだけでなんとかなるのだろう か「食材？そんなのあるわよ」

凜は満面の笑みで前のほうを指さした

そこには色々なモンスターが倒れていた

たぶんそのモンスターは凜がすべて倒したのだろう

「うわ……さすがだな凜」

「こんなもん楽勝よ」

でもかなりのモンスターが倒れていてさすがに運べる量ではなかつた

「でもどうするんだ？」の量……」

「それなら問題ないわ」

「問題ない？ いやおおありだろ……確実に一人で運べるような量ではなかつた

「問題ないだと？なんだ？PGPでよくあるよりヒューリックになんでもはいるみたいな感 じか？」

俺は冗談交じりで言つてみた

「その通りよ！」

凜は自信満々にそう言つた、[冗談で言つたはずの]ことが自信満々にその通りよと言われ たために俺は開いた口が塞がらなかつた

「え……」

「なによその顔……」

「いや……まじなのか？」

「まじよ」

「まじなのか……でリュックはどこだ？」

「リュックじゃないわこれよ」

凜はこれよといつてなんか丸い輪がついた携帯電話みたいなのが

だした

「なんだこれ

「モンスターを携帯できる機械よ」

また便利な……

「それはどう使うんだ?」

「ん? この先端の輪をモンスターに当てた瞬間モンスターが輪の中に吸

い込まれていった

そしてその携帯の画面にモンスターの名前と所持数が表示された、画面の中に取り出し というのがあつたため、その輪から自由自在にその場で、モンスターを出し入れできる ようだ

「すげえなゲームの世界は」

「まあこれも買えるからG P 溜まつたら買つておきなさい」

「ああそうするよ」

「じゃさっそく口座を作りにいきますか!」

「そうだな!」

「いこよ

凜がそういうて目の前の建物を指した、そこには大きくBANK

と書かれていた

「いこか……」

そういうて俺と凜は建物の中に入った

「なんかいたつて普通なんだな……」

中は現実世界の銀行とまったく変わらなく、ATMとかも普通にあ

つた、唯一現実世界のと違うと書いたらカウンターにいる人の髪の色が緑や紫の人がいるつてことくらいだ。……でも流石、ゲームの世界だけあってそんな髪の色でも似合っていた。「さて、どうすればいいんだ?」

手続きとやらばどうやるのか知らなかつた

「カウンターでGPカードを発行したいのですががつて言えば作れるわよ」

そう言われたので俺はカウンターに行つて、真に言われた通りGPカードを発行したのですかといつてみた

「GPカードの発行ですね。……少々お待ちください」

一分くらいこまつたところで戻つて来た、そして紙をもらつた

「ここに記入してください」

と言われたのでその紙に年齢や氏名などをさうつと書いてカウンターの人に返した

「終 鏡也様ですね、少々お待ちください」

今度は一、三分掛かつた

「こちらがGPカードになります、再発行はできませんのでお気をつけください」

再発行ができない……?これをなくしたらどうなるんだ?

「なくしてしまつたらどうなるんですか?」

「GPをBANKで引き落としされる場合GPカードが必要になりますので、紛失されるとGPが引き落としきなくなるのと同時にBANKにGPを預けることもできなくなります」

なんだと……?引き落としができない……?

「ほかに質問等はござりますか?」

「いや……」

黙つていろとお次のお客様がいるので、と書つて追い出されてしまつた

「あら、結構早かつたわね、どうしたの? そんな浮かない顔して」「いや……凜、GPつて手に入れたら勝手にこのカードの中にはい

るんだよな？」

「そうよ？」

GPカードの紛失それはこのゲームでの死と同じようなものだつた
「じゃあなくしたらもう終わりつうわけか……」

「まあ そうなるわね、このゲームにはGPカードを奪われた人なん
て結構いるわよ？」

奪われる…… そうか…… その可能性もあるんだよな

「それでどうなつたんだ？」

「もちろん終わりよ、このゲームから出る」ともできなくなつたわ

「そうか…… 助かる道はないのか？」

「なくはないわ

どうやら助かる道はあるようだ……

「なんだ？」

「他人のGPカードを盗むのよ

え……、まあ普通に考えればそうゆうことなのだろつ

「GPカードはまったく便利なのか不便なのかわからないけど、カ
ード一枚でGPの出し入れができるのよ」

なんつうカードだ、だからGPカード発行のときに暗証番号とかの
設定がなかつたのか……

「管理もありやしねーな、GPに関しては」

「まあ利口なひとは盗みに行くこともあるわよ」

これなら力がなくてもGPを貯められてるやつがいるわけか

「さ、さつやとGPカウンター買いにいくわよ急がないと」

周りはもう暗くなり始めてきていた

「あれ？ 七時！？ もうこんな時間か……」

俺は時計を見た、ゲームの世界も現実の時間と同じ進み方だつた

「 そうよ！ もうお店しまつちゃつわ……」

店？ BANKはどうなんだ……？

「BANKは閉まらないのか？」

「BANKはなんとかわからないけどずっと営業してるわ

「Jは違つんだな……現実と

「何時に店つて閉まるんだ?」

「八時よ、でも飲食店は十時くらいまでやつてゐるわ」

飲食店は現実世界と結構同じ感じなんだな……なんだJのゲームめ
ちゃくちゃじやないか「着いた、Jよ。……」

なんやかんや話していると着いたみたいだつた、そこのはブリキの
おもちゃの看板でホビーとかかれていた

「おもちゃ屋……?」

「やうよ

そうこつて凜は店の中にこつていた

「なんだおもちゃやとこつかなんか色々あるな……」

中はおもちゃとこより、機械類がいっぱいあつた

「まあホビーとこい」とやつてゐんだからいいんじやない?」

まあ凜の言つ通り店主がよければいいのかな……

「おつちやーん、GPカウンターーつー」

凜がそう言つたので、そのほうを見ると六十畳前半くらいのおつと
んがすわつて機械をいじくりまわしていた

「おつ! GPカウンターな1000GPだ」

おつちやんが機械を棚に置いてGPカウンターを取りに行つた

「1000GP? そんなに持つてゐるのか?俺

「もつてるわよ、ペアコン倒したんだから」

と凜と話しているとおつさんが戻つて來た

「ほー、GPカウンター

と渡されたはいいがどう会計するのだろつか……

「会計つてどうやるんだ?」

小声で凜に聞いた

「GPカードを渡せば平氣よ」

と言われたのでGPカードをおつさんへ渡した、ゲーム世界ではGP
カードをクレジットカードと同じようなものっぽい、変な機械に
カードを入れて終わりだった

田当ての品も買ったことだし、店を俺たちは出た
「凛、買つたはいいけどどう使うんだ？」

GPカウンターの使い方を説明してくれなかつた
「下のほうにカードを挿すところがあるんでしょ？そこに入れるの
よ」

といわれたので下のほうにカードを挿してみた、そしたら画面に「NOW...LOADING」と表記されたので待つてみた
「ロード終わつたわね」

凛がそう言つたので画面をみてみると153GPと表記されていた
「いま俺は153GP持つてゐることとか？」

「そうね……つかあんまりないのね」

そりやまだ来てから1日目だからな……

「とりあえず食事にしましょ」

ああそのためにあんだけ苦労してモンスターを狩つたんだもんな……

「ああ、早く飯にしようぜ……」

「飯……？つかモンスターを狩つたわいいけど、そのまま食つのか？
「どう食べるんだ……？」

「切つて焼くのよ」

「切つて焼く……？」

「切るのはわかるが焼く？」焼くつて火使つよな

「焼くのよ！私の能力を使えば楽よ」

ああ能力か……便利だな、火を起こさなくとも火を使えるなんて……

「便利でしょ？」

「ああ、本当に便利だ」

俺の能力はなんなんだろ？

「さて調理するわよ」

凛はそう言つて刃渡りが一メートルくらいある刀で簡単にモンスターを切り裂いたその後能力の赤い石の力でさつとモンスターを焼いてしまつた

「なんか豪快だな……」

「下手に手いれるより簡単に調理したほうがいいでしょ？」

まあその通りだな

凛と俺はさつさと食事を済ませた

「意外とつまかった」

モンスターといつとあんまりいいイメージはないだろう
だが意外とうまい……

「でしょ」

凛は満足したような顔で笑つて言つた……そんときの凛は可愛いと思
えた

「それよつこれからどうするんだ?」

「飯食つて……あとやる」とつたら……睡眠くらいいか……?

「どうしようかしら……寝る?」

いまは九時だ普段だとこれからだぜ……みたいな時間だ「いまから
寝て早めに起きて食事の材料を探しましょうか……」

「そうだな……でもどこで寝るんだ?」

「ここは周りに崖しかないような場所だ当然宿なんかはない

「野宿よ」

まあそつなるだらう……宿がないんだから必然的に野宿になる……

「そつだよな……でも危なくないか?」

「ここはモンスターが出る場所だ……

「まあ確かに……でも平氣よ」

凛は能力の茶色の力を使つて家みたいなものを作った「え……すご
いな……本当に便利だな」

俺は改めて凛に感心した

「さて……寝るわよ」

そう言つて凛は家に入つていった……後に続いて俺も入つた

「適当に寝て、私はもう寝るから」

と言つて寝たので俺もそちらへんにねつこひがつた……今日は色々
あつた気がする……凛に会つてまだ一日しかたつてないんだな
なんかこの一日は何週間にも感じた……、そんなことを思いながら

俺は床についた……

「起きなさい…… わたとと食材を調達してこいへわよ」俺は凛の声で目が覚めた。「いま何時だ……？」

「六時よ」

「六時！？ なんつう時間だ…… 早すぎる……」

「六時…… 寝る」

「ついあえず寝ることを優先した……」

「なにいつてるのかしら……？」

凛は怒つて「どうだ…… だが気にせず寝よつ

「無視するのね……？」

「無視してないよ 怒つてるのか？」

「怒つてなんかないわよ？ ほら笑つてるじゃない」自分では笑つてるようだが声は笑つてはなかつた

「起きないと殺すわよ？」

そつ言われたとき俺は背筋に寒気を感じた……、やばいいまの凛の言つことを聞かないと殺される……と直感した

「わかったよ……起きます」こまは素直に言つことを聞つて……

「素直で宜しい」

「んで…… どうするんだ？」「起きたはいいにカビヅリするんだうつか

「モンスターを狩るのよ」

寝起きでいきなりモンスターを狩るのか……

「俺は寝起きだぞ？ いきなりあんな奴らとやつあつのか？」

「朝ごはん食べたくないならいいわよ？」

確かに朝ごはんは食べたい…… だが寝起きで足元もおぼつかない中でモンスターとやりあうのが……

「食べたくないの？」

凛はもう一度今度は強い口調で言つてきた

「食べたいです……」

なぜか俺は敬語になつていた

「じゃあ狩るしかないわよね」

「買うと言つ手段はないのか？」

「はんならわざわざ狩らなくとも買えれば済むことだと想つ

「買う？あなた153GPしかないのになにを買おうと言つのよ
う……痛いところをつかれたたしかに俺は153GPしかない…

…これは狩るしか無さそうだった

「わかつたよ……狩るか

「そうと決まればさっそく行くわよ」

と言つて凛は家を後にしたので俺も後に続いた
「朝っぱらなのにモンスターなんているのか？」

「いるわよ」

そうなのか……結構モンスターも活発なんだな……

「まあ頑張るか……」

今日こそは俺も能力を解放したい

「いきなり発見」

凛がそう言つたのでそつちのほうを見ると巨大なカブトムシみたい
なのがいた

「なんだ……」

「こいつはメガカブト堅いわよ

そのままの名前だな

「堅いのか……行けるか？」余裕よつう顔でこつちを見てきた、そ
の瞬間赤い石でメガカブトの顔田掛けて
炎を放つた

一瞬にしてメガカブトは倒れた

「さて……次行くわよ」

「お、おう

そして俺たちは八時くらいまで狩った

「だいぶ雑魚モンスターなら倒せるよつになつたじゃない」

俺も四、五体は倒せた

「ああ、だいぶな」

「じゃさつと朝ごはんにしますか……」

「おつ……つかもうヘトヘトだぜ」

一時間ほど動いただけでこんなに疲れるとは思わなかつた、だいぶ体がなまつていた

「だめねえー、こんなんでばてるなんて、こんなんじゃ対人ですが黙目になるわよ」

凛の言う通りだつた……もう少し体力をつけなきゃな……

「つかさつさと飯にしようぜ……」

もう腹が減つて死にそうだつた

「それもそうね……」

と言つことで俺らは飯にすることにした

「ふう……腹一杯だぜやっぱモンスターの肉は重いな」

味は相変わらずだつた……今回はメガカブトとといつて虫もいたが甲羅等を除くと意外といける味だつた

「さて」はんも食べたし、今日はどうする?」

「俺はまだ来てまもないから……出来れば町を案内してほしいかなまだホーフタウンのことはなにも知らなかつた

「そうね……案内しましょうか

「そうしてもらえるとありがたいな」

「わかったわ、じゃさつそく行きましょうか

と言つことで凛に町を案内してもらつことになつた、町にはBANBKやGPカウンターを買ったホビーのおっちゃんの店や飲食店などがいっぱいあり九時だと言うのに入人が結構いて賑わつていた、店なども早くから開いていて人が結構出入りしていた

「朝早いのに賑わってるな」「まあそりやそうね……毎まで寝たりしてると襲われるわよ?」

まあそれもそうだな……これは常に警戒しないといけないようだな

……

そんなことを思いながら歩いていると不思議な貼り紙を見つけた「今月はあっちむいてほい! 優勝賞品はダイアモンドダガーと5000GP」と書いてあった

「なんなんだ? この貼り紙」凜に聞いてみた

「ああ、これは月に一度の月例大会よ」

月例大会……? ああ、ゲームサポーターがそんなことを言つてた気がする

「今月はあっちむいてほいらしいわね……今日だし参加してみる?」

今日は七月三十一日……毎月、月の終わりにやるらしく……

「暇だし、参加するか……」時間は十一時からやるらしく

「手続きを済ませましょつか」

手続きがあるのか……まあ そ う だ ろ う な

「そ う し ょ う ぜ」

ということでおまかせ月例大会のあっちむいてほいに参加することになった

「ああ! 毎月恒例の月例大会! 今月はあっちむいてほいです!」

ナレーターの声で月例大会が始まった

みんな一斉にあっちむいてほいを始めた

あっちむいてほい……能力とかはまったく関係ない、ただの運で勝

敗が決まる

俺は順調に勝ち進んでいった……凜は途中で負けたらしく違つところに移動していた

俺は堂々決勝にまで進んだ、能力はなくとも運はあつたらしい

「さあ! 決勝です 今回生き残ったのはまだこのゲームに来て間も

ないルーキー オジ 鏡也！ もう1人は謎の美少女！ 湊 楓！」
とナレーターに紹介された「さあ、遂に決勝！ ルーキーが勝つか？ 美少女が勝つか？」

ナレーターの声をスタートに俺らはあつちむじてほいを始めた
「おお！ 勝ったのはまだ来て間もないルーキー！ オジ 鏡也！」
一斉に歓声が沸いた

「俺は勝ったのか……」

「さて優勝賞品はダイアモンドダガーと3000GAPになります
俺は優勝賞品を貰った

凛が近くに寄ってきた

「おめでとう、鏡也 あなた運だけはあるのね
運だけはって……」

「一言多いぞー」

「「めん、「めん、おめでとうー」

「ありがとう」

それにしてもダイアモンドダガー……強いのか？

「ダイアモンドダガーか……」

「なによ？ かなりレア武器よ？」

「そうなのか……？」

「そうよ！ ダiamondを刃に使われていてなんでも切れると言
われているのよ？ まあ能力で作られた武器に勝てるかはわからない
けど……」

「いくら強い武器でも能力には勝てないか……

「そうなのか……」

「そんないいダガーを手に入れたんだわ、私のダガー返してくれな
い？」

「そうだったな、すまん、ありがとう」

「それで能力が解放されてなくても少しは強いモンスター勝てるで
しょ？」

「そうだな……」

他愛のない話をしながら町を歩いているといきなり話をかけられた

「おい！ そこの坊主」

「坊主？ 僕か？」

黒い服に身をまとった黒髪短髪の男が声をかけてきた

「お前しかいないだろ？」

いきなり喧嘩を売った口調だな……

「なんだ？」

「ダイアモンドダガーをよこせ」

「なんだと！？」

そう言つた瞬間そいつが消えた……

凛が変な声をだした

「ダイアモンドダガーを渡さないとこいつを殺す」

凛が人質に取られた

「凛ッ！ …」

「大丈夫……ダイアモンドダガーは渡しちゃだめよ」 凛が必死にそう言つた

「ほう……こんな状況でよく言えたもんだ」

たしかに凛が人質に取られた今、この状況はまずい

「おい……凛を離せ」

俺はキレそうだった

「さつさとダイアモンドダガーを渡しな、そしたら解放してやるよ

「ざけんな……」

「あ？ もう一回言つてみろ」 「ふざけんなってんだよ……」 その瞬間、俺の体から湯気が出るよな熱さになつた

「鏡也！？」

「……殺す……お前を殺す」 俺はそいつて凛を人質に取つていてる奴に突つ込んで行つた

「ふつなめられたもんだな」 そついつて奴は俺を軽く避けた

「なに……！？」

次はもつと早く……

俺はそう思いながらまた突っ込んで行った

「何度も……」

同じだ、と奴がそう言つ前に俺は奴を一発殴つた

「なんだ……早くなつてやがる

「黙れ……さつさと凜を離せ」

「お前がダイアモンドダガーを……ツ

また奴が言い終わるまでに一発殴つた、そのまま俺は凜を奪い取つた

「やるじゃねえか坊主……俺はクロお前は」

「お前に名乗る名前はない……ツ」

「そりゃうそりゃうそ、まあ今日は許してやるよだが必ずダイアモンドダガーは頂く」

そう言つて奴はどこかに消えた……

「凜……大丈夫だったか?」あれ……目の前が霞んで見える……

俺はそのまま意識を失つた

「鏡也……！」

俺は凜の声で目覚めた……「凜……大丈夫だったか?」俺は凜の心配で自分の心配をする暇はなかつた

「私は大丈夫よ……鏡也は?」

「俺も大丈夫だつかどのくらい寝てたんだ?」

もう周りは明るくなつていた

「丸一晩寝ていたわ

かなり寝ていたようだ……

「つか鏡也、能力を解放できたんじゃない?」

凜は疲れたのか壁に腰を掛けながらそう言つた

「そりゃうそりゃうそ、俺でもよくわからないんだ」

俺は凛が捕まつて苦しそうにしていたから助けたいと思つた、そしたら全身の血が沸騰するように熱くなつた……

そんなことを思つていたら凛が

「なんか変わつたところはないの?」

と話を掛けてきた

「今は特にないかな……」

今の俺はさつきまでの俺とは違つて能力が使えないときの俺と同じだった

「そつか……てつくり能力が解放したのかと思つたんだけどな」と凛が残念そうな顔で言つた

「「めんな……」

「鏡矢が謝るようなことじやないわよー」

「そつか? 凛に迷惑かけてばっかな気がするんだが……」

悪いという気持ちでいっぱいだった

「まあそれはそうね」

え……俺はてつくり『そんなことはないわ』的なことをいつと思つていたのだがまさかこんな返事が帰つてくるとは思つてもしなかつたため睡然としていた

「そんな顔してどうしたのよ」

俺がそんなことを思つていたとき表情にでていたのか凛がそんなことを言つてきた

「いいや、なんでもないよ」

「そう? 迷惑かけてるんだから早く能力解放しなさいよ……」

またズバッと言いやがつた……まあ確かに迷惑はかけているかもしれない……いやかけている……まあ俺が能力を解放する以外に迷惑をかけないようにするすべはないのだが……「まあがんばるよ……なるべく凛に迷惑かけないようにな」

「なるべくじやないでしょ! なるべくじや……まあ応援していわよ」

最後は笑顔でそういつた、これも凛なりの気遣いとかなのかなと俺

は思つた

「おう！応援サンキュー」

「ど、どういたしまして」

凛が照れている新鮮だな

…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2887w/>

Game of Gather of Wish

2011年10月9日15時55分発行